

アスペクト(知覚)に対する態度

—ケーラーの〈ゲシュタルト〉と〈アスペクト〉との対比から—

教育学コース 佐藤 邦政

The Internal Relation between Wittgenstein's 'Aspekt' (Aspect) Perception and 'Einstellung' (Attitude)
From the Perspective of the Comparison between Köhler's Gestalt and Wittgenstein's Aspect

Kunimasa SATO

It has already been pointed out that the concept of Wittgenstein's Aspect perception is closely relevant to that of Köhler's Gestalt. However, it has not been elucidated specifically what results Wittgenstein follows from the comprehension and the criticism on the Köhler's concept of Gestalt, and whether Wittgenstein's claim is convincing or not. The purpose of this thesis is to reveal the points mentioned above, and then make it clear that Aspect perception is internally related to an attitude toward objects.

目 次

- 1 節 ゲシュタルト心理学
- 2 節 アスペクト知覚
- 3 節 アスペクトとゲシュタルト

1 節 ゲシュタルト心理学

ケーラー(Wolfgang Köhler)のゲシュタルト(Gestalt)についての主張を取り上げるためには、その主張がなされる背景を理解する必要がある。そのために、まずケーラーを含むゲシュタルト心理学について思想的な観点から一瞥する¹⁾。

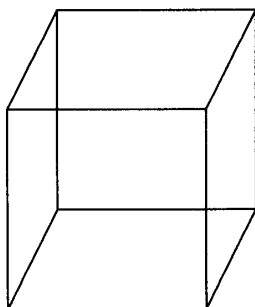
ゲシュタルト知覚とは、例えば下図1のような図形をひとつのまとまりとして捉えるように、描かれた図形やメロディーなどをまとまりとして認識することである。このような現象は物理学者・哲学者であるマッ

ハ(Ernst Mach)の『感覚の分析』(1886)から示唆を受けたエーレンフェルス(Christian von Ehrenfels)によって取り上げられ、〈ゲシュタルト質〉(Gestaltqualität)と名付けられる²⁾。

エーレンフェルスによれば、ゲシュタルト質とは感覚に与えられる要素的な感覚印象の総和以上のものである。例えば、メロディーは音素(要素)なしにはありえないが、まったく異なった音素を組み合わせても同じメロディーが生じることや、同じ音素であってもその配列を変えると、異なるメロディーになることが知られている。このようなことから、要素である感覚質と区別されるゲシュタルト質という存在が措定され、それは物理的刺激に対応する感覚要素が単純に加算されたものではなく、それ以上のものであるとされる。ここでは、ゲシュタルト質が感覚要素以上であるとは具体的にいかなることかは重要なことではない。いま押さえておくべきことは、エーレンフェルスによるゲシュタルト質の規定には、感覚として与えられるものが原子的な要素であること、そして、それが物理的刺激と対応していることが自明なものとされていることである。

上記の前提は、エーレンフェルスの立場を批判的に引き継いだマイノング(Alexius Meinong)をはじめとするグラーツ学派によるゲシュタルトの説明においても維持される。マイノングは、個々の感覚要素とその要素同士を関係づけるものとを区別し、メロディーの

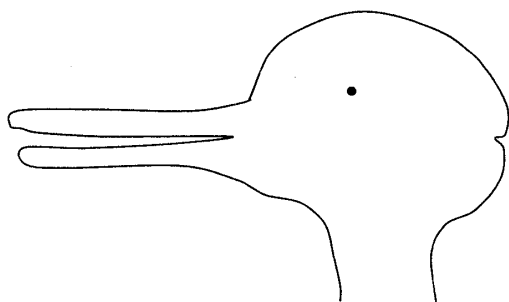
図1



ようなゲシュタルト質は両者を部分として含む高次の対象であるという説を唱える。彼によれば、知覚されるものは原子的な感覚要素である一方で、ゲシュタルト質には個々の感覚要素を関係づける何らかの知的作用が必要とされる。

グラーツ学派がゲシュタルト質には知的作用が必要であり、それが判断のようなものに基づく主張する理由はなんだろうか。彼らの注目するものが、アヒルとウサギに反転するジャストロウ図形(図2)のような、多義的な図形の存在である。グラーツ学派は、この図形が多義性という事態を物理的的刺激が一定であり、したがって感覚に与えられる個別的な要素が不変であるにもかかわらず、異なるゲシュタルト質が生じていると捉え、図形が多義性は非感覚的な判断によるものであると結論する。

図2



ここで注意すべきことは、グラーツ学派の主張には、感覚に与えられる刺激が一定であり、かつそのような物理的的刺激に感覚が一対一に対応していることが前提にされていることである。そして、そのことは先のエーレンフェルスによるゲシュタルトの規定においても前提にされている。実際には、この考えは当時の心理学³⁾の大前提であり、後にケーラーをはじめとするベルリン学派⁴⁾がこれをまったく根拠のない〈恒常仮説〉(constancy hypothesis)と批判するまで、エーレンフェルスやグラーツ学派といった初期のゲシュタルト概念の規定において自明なものとされ、疑われずに受け入れられていたのである。

ゲシュタルト心理学と称されるうちでも、ケーラーが属し、そのほかウェルトハイマー(Max Wertheimer)やコフカ(Kurt Koffka)を代表とするベルリン学派は、このような時代を背景として生まれてきた。それゆえ、ベルリン学派のゲシュタルトについての説明は、その成立の動機からして既述した当時の心理学(要素主義や連合主義)への反作用という性格を帯びることになる⁵⁾。

ケーラーによれば、第一にゲシュタルトと要素の知覚とは相容れないものであり、したがって、ゲシュタルト知覚は高次の対象ではなく、感覚の次元にある。このことは、ファイ(ϕ)現象によって証拠づけられる。ファイ現象の身近な例として、ケーラーの挙げている映画を挙げよう⁶⁾。映画のフィルムは多数の静止した画像が次々と間断なく映し出されることによって構成されている。にもかかわらず、映画を見るとき、私たちはその画像一つ一つではなく、スクリーンに映し出された人物や対象の動きを見る。画像を回すスピードを遅くすると、画像がコマ送りのようになり、個々の画像を見ることはできるが、今度は動きを見ることができなくなる。すなわち、動き(ゲシュタルト)を見ているときには個々の画像(要素)は見え、画像を見ているときには動きを見ることができない。このことから、ケーラーは動きというゲシュタルトを見ることと、一つ一つの静止画像という要素を見ることは相容れないと結論する。

ケーラーの主張の二点目は、ゲシュタルトは知的作用のような判断によるのではないということである。映画を見ている観客が、それが静止画像の連続に過ぎないことを理解したとしても、それを動いているものとして見ることを止めることはできない⁷⁾。動いているものとして判断することと見ることは異なるのである⁸⁾。このことはミュラー＝リュアーの錯視図形を例にしても説明される⁹⁾。ケーラーによれば、グラーツ学派の主張に反して、ゲシュタルトは判断によるものではないのである。

では、ケーラー自身はゲシュタルトをいかに説明しているのだろうか。

彼によれば、ゲシュタルトは経験以前に、感覚に直接与えられる所与である。さらに感覚に与えられるものは、原子的な要素ではなく、その時点で体制化されたもの(Organization)である。

私が一枚の紙や鉛筆などの使い方や名前を、それ以前の経験によって知っているということ、したがって、それらは「意味(meaning)」で満たされていることについては躊躇なしに認めよう。だが、このような事実と以下の言明を認めることとの間には大きな隔りがある。すなわち、その言明とは、紙や鉛筆は、私たちがそれについての実際的な行為や使用についての知識を得る前には、視覚野(visual field)において分離されたユニット(segregated units)として存在してはいないというものである。(略)[確かに]色の

場合と全く同様に、私たちが知識を得る過程の中で、感覚ユニットは名前を与えられ、より豊かなシンボルとなるだろう。にもかかわらず、感覚野における分離されたユニットとしては、そのような知識の蓄積に先立って存在している。このことこそゲシュタルト心理学が擁護しようと唱える考え方である。感覚世界が大人にとってこれほどに意味で満たされているように見えるのは、まさに元々の体制(original organization)と境界付けられた全体(wholes)の分離のおかげであるとさえ主張しよう。というのも、意味は感覚野に徐々に入ってくるうちに自然的体制(natural organization)により境界付けられるラインに沿っていくものだからである¹⁰⁾。

ケーラーによれば、第一に、ゲシュタルトとは私たちの経験に先立って、あらかじめ感覚野において存在している〈自然的体制〉である。第二に、私たちの経験が蓄積されていくにしたがって、自然的体制は、それに沿って、紙や鉛筆などの使い方や名前といった豊かな意味で満たされていく。私たちは、そのような過程を経て、紙や鉛筆を名指したり、使用できるようになっていくのである。

2節 アスペクト知覚

ウィットゲンシュタイン(Wittgenstein, Ludwig)はケーラーの『ゲシュタルト心理学』(Gestalt Psychology)を、哲学の舞台に復帰して間もない1930年以降に読んでいたと推定され、すでに1933年の『哲学的文法』ではケーラーの著作に登場する図形例が取り上げられ、考察されている¹¹⁾。そして『心理学1, 2』では、ケーラーのゲシュタルトは中心的な主題のひとつとして取り挙げられる。例えば、一般に『探究II』において知られるアスペクト盲(aspektblind)という概念さえも、『心理学2』において登場するころは、ゲシュタルト盲(gestaltblind)とも言い換えられている¹²⁾。このような事実からも、アスペクト知覚がゲシュタルト概念から大きく影響を受けていることは間違いのないと言える。

ウィットゲンシュタインのケーラーの考え方に対する立場は次の一節に表明されている。

私の見ているものは一ケーラーの見解に反して—まさにひとつの意味である¹³⁾。

意味を見るということ述べられていることが、ゲシュタルトと対置される考えであるらしいことがわかる。先のケーラーの引用を考慮するならば、ここでもいかなることに対して批判が向けられているのかが明らかとなる。それは、感覚野におけるゲシュタルトを見るということに対してであり、さらには、そのようなゲシュタルトに意味が与えられていくという仮説に対してである。

では、意味を見るとはいかなることであろうか。Schulte (1993, pp.75-85)によれば、ここでウィットゲンシュタインは「見る」という語の使用に注目させようとしている。「見る」という語は、通常、感覚野におけるゲシュタルトに対して用いられるものではなく、日常的な使用のされ方にしただけで意味が与えられる。「『見る』という言葉が通常使用されるとき、私たちは木や家、自動車、あるいは子どもなどを見ると言う。私が『ある対象』や『ある事物』を見ると言うことは、ほかの多くの点で十分に定義されている文脈においてのみ妥当であり、理解可能である。(略)知覚はそれ以上に特徴のない純粋なゲシュタルトを見たり聞いたりすることを意味しないのである」¹⁴⁾。

なるほど、『探究』を執筆したころのウィットゲンシュタインが「見る」という語の言語ゲームの多様性に注意を促していることは確かであろう¹⁵⁾。だが、ウィットゲンシュタインの主張がそれだけのことであるならば、それによって、ゲシュタルトを「見る」という言い方は不自然であると退けられるとしても、ゲシュタルトの存在そのものを措定することは反駁されはしない。むしろ、「見る」という語を多様な仕方で使用することは、経験に先立つゲシュタルトという存在に豊かな意味が与えられていくとするケーラーの主張と両立可能なものである¹⁶⁾。

ここで先に結論を述べておくならば、意味を見るということ、ウィットゲンシュタインは「見る」という語の言語ゲームに注目を向けさせようと意図しただけではなく、感覚野におけるゲシュタルトから意味を豊かにする、すなわち対象を名指したり、使用するようになるという仮説が無意味なものであることを主張している。ウィットゲンシュタインによるケーラーへの批判は的を射ていないものが見られるものの、それは最終的には成功していると思われる。これから、そのことを示すことにしよう。そして、それが示されることで、同時にウィットゲンシュタインがアスペクトという新しい概念を導入した理由も明らかになるだろう。この具体的な考察の前に、アスペクトという概念の基本的な

性格をあらかじめ概観しておくことにする。

アスペクト知覚とは〈として〉見るという構造をもつ知覚のこととされる。一例として三角形のアスペクトについて挙げよう。

いま、例として三角形のアスペクトを考察しよう。三角形は、三角形の穴として、三角形の物体として、幾何学図形として、底辺の上に立つものとして、頂点に吊らされているものとして、山として、くさびとして、矢印ないし指示標識として、もしくは(例えば)直角をはさんで短いほうの一辺を下にして立っているはずであったものが転倒したものとして、平行四辺形の半分として、そのほか様々なものとして見るができる¹⁷⁾。

『心理学1, 2』では、アスペクト概念は広い外延を持っている。例えば、子どもたちが汽車ごっこに熱中しているとき、その子どもはお互いを汽車として見なしているという記述がある¹⁸⁾。その一方で、他者の悲しみを見るというような感情に関する記述もある。

そこで、これからの議論では、主題と異なる問題を避けるために、扱う対象を以下のように限定する。まず、知覚されるものは紙に描かれたアヒルの絵や立方体の図形などの二次元のものとする。それによって本論文では、ゲシュタルト心理学者たちが挙げる例のうち、ウイトゲンシュタインが主題として扱っていない動きの知覚(先の映画の例など)をここでは問題としないことにしよう。次に、アスペクトを知覚する人物がすでにある程度概念を身につけていることを前提にする(本文では、このような人物をPとする)。それにより、ここで扱われる問題を、いまだ概念を身につけていない赤ん坊がいかにして概念的な対象を知覚するようになるのかという問題から区別する¹⁹⁾。

3節 アスペクトとゲシュタルト

ウイトゲンシュタインは、ケーラーの名前を直接挙げてはいないものの、感覚所与のゲシュタルトを次のように批判する。

視覚印象の「体制」(‘Organisation’ des Gesichtseindrucks)を色と形と同列に置く人は、内的対象としての視覚印象から出発しているのである。視覚印象は、内的対象として考えられることによって、もちろん、ばかげたもの—[役割の]定まらない奇妙な構成物—になる。というのも、像との類似性がいまや壊れてしまう

から²⁰⁾。

この引用における「視覚印象の『体制』を色と形と同列に置く人」とはケーラーを指している。ケーラーによれば、ゲシュタルトは感覚における直接的な所与である。言い換えれば、経験によってその使用の仕方や名前が知られる前に存在する視覚野における内的対象なのである。

では、このようなゲシュタルトの存在が「奇妙な構成物」に過ぎないとされる理由はなんであろうか。

まず、すでにくいつかの先行研究で指摘されている(ケーラーの考えに対する)誤解を解いておこう。ウイトゲンシュタインは「[アスペクトは変化するという]そのことだけで、視覚印象における『体制』を形や色と同列に比較するということは破棄される」²¹⁾と述べる。形や色とは異なり、体制の変化は図示されないことが指摘され、そして、そのことで体制は形や色と同じ次元のものではないことが述べられる。たしかに、この指摘自体は正しいが、それによってケーラーの擁護する自然的体制が所与であることが反駁されるわけではない。というのも、ウイトゲンシュタインの体制についての理解はケーラーの自然的体制についての考えを誤解しているからである。ケーラーによれば、ゲシュタルトとはまさに図形そのもの(ひとつのまとまりと見なされている対象)のことであって、それに意味が与えられたものとは別の次元のことである。例えば、ジャストロウ図形は経験によってウサギやアヒルなどの意味が与えられるのであって、それに先立つようなウサギやアヒルという体制があると述べているわけではない。このことから、ウイトゲンシュタインが体制で意味することはケーラーの述べるゲシュタルトとは異なることがわかる。したがって、形や色の変化は図示できるのに、体制の変化は図示できないという理由から、ケーラーの主張がただちに反駁されるわけではない²²⁾。

ケーラーとウイトゲンシュタインとのゲシュタルトについての理解のすれ違いは次のウイトゲンシュタインの主張にも見てとれる。

この絵をウサギとして見てはいたけれども、そのときにはそうした動物が存在することは知らなかったのでそう言うことはできなかつたなどと言う人を私は理解できない²³⁾。

ここではウサギという概念を知らない人がウサギの絵を見ても、ウサギを見ることはできないことが指摘されている。ここで語られていることは、ある概念を知らない人がその意味を見ているということは論理的に

ありえないという(自明な)ことである²⁴⁾。

上記のことから分かるのは、ワイトゲンシュタインはゲシュタルトないし体制をアヒルやウサギといった意味までも伴うものであると理解しているということである²⁵⁾。だが、ケーラーはゲシュタルトをそのように捉えていない。ケーラーは、ウサギやアヒルといったゲシュタルトを見るというのではなく、そのような意味以前の形としてのゲシュタルトを見ると述べている。つまり、彼によれば、形としてのゲシュタルトが、そして、それだけがあらかじめ見られている。これまでのことから、ゲシュタルト(体制)についてのワイトゲンシュタインとケーラー両者の理解はすれ違っていることがわかる。したがって、ここで暫定的には、ワイトゲンシュタインのゲシュタルトの理解に基づく批判によっては、ケーラーのゲシュタルトについての主張は論駁されていないと結論することができる。

ケーラーは、ゲシュタルトの存在を見ることがそれを名指すことや扱ったりするような行為をする必要条件であるとみなしていることになる。では、名指したり、扱ったりするような行為と、そのために必要である形としてのみ見られているゲシュタルトとはいかなる関係にあるのだろうか。ゲシュタルトという存在はいかにして私たちの行為へと導くのだろうか。

ワイトゲンシュタインが、像や絵のうちに私たちの行為を必然的に導くなにかがあるのではないことを示したのが『探究 I』においてである。そこで挙げられた例は立方体の図形であった。幾何学を学校で教え込まれた私たちは一般に、それが二次元の図形でありながら、立体的な図形として扱うようになる。だが、そのような投影法は、その使用を教え込まれる前から、図形そのものにあらかじめ備わっているのではない。

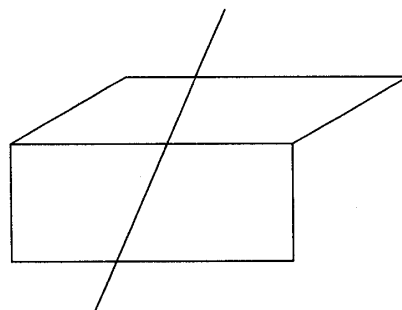
立方体の像は、私たちにある特定の使用を示唆していた。だが、私はそれを別の仕方でも使用できたのである²⁶⁾。

例えば単に平行直線の集合や、猫の爪跡として見なされることも考えられるように、描かれた図形は決して三次元としての投影法に限られてはいない。すなわち、立方体として見なされているものはいかようにも解釈される可能性がある。私たちにとって立方体として扱うことがどれほど自然なものと思われようとも、その図形のうちにあらかじめ立体としての投影法を必然的に導くようなものがあるわけではないのである。

そして、より重要なことは、三次元としての投影法ができないのではなく、そもそも幾何学や立方体とし

て扱うような生活様式がなければ、人々はそのような扱いをしないということである。下図3を例としてみよう。この図は、私たちの多くの人々にとって直線が凸凹に見える図形上に描かれているように見える。だが、図3を直線と図形とに区別せず、全体としてひとつのサインとして捉える(例えばある道路標識として使用されている)方が自然であることもありえよう。ここで本質的なことは、自然であるばかりか、ある人々にとって、道路標識としてしか扱わないという生活様式がありえるということである。そのような人々は、そもそも私たちが扱うようには扱わない。このことは、そのように扱うことができないということを意味しない。というのも、そのように扱うことができないということは、すでにそのように扱うことができることを知っている人だけが語りえることであるから。このことから次のことを結論できる。知覚される対象がひとまとまりのものとしていかに見なされるのか、ケーラーの言葉で言えば、自然的体制の境界がどのように引かれるのかは経験以前に決定されているのではなく、それがいかに扱われるのかということと内的関係にあるのである。

図3



経験に先立って存在するゲシュタルトに対しても、この議論を適用することができる。ゲシュタルトのものには適用のされ方は示されていないのであり、そのゲシュタルトに対して知覚者はいかなる反応をすることも許されている。あるいは、体制化されるゲシュタルトの境界がどこに引かれることになるのかは、経験に先立って決定されてはいないのである。

ここで注意すべきことがある。それは、ゲシュタルトの境界が私たちの生活様式と切り離せないことが示されたからといって、知覚経験のないある図形をひとまとまりのものとして知覚することができないということが帰結するわけではないということである。例えば、ある人(P)が立方体という概念を知らずに、目の前の図形を立方体として見なせなくても、それをひと

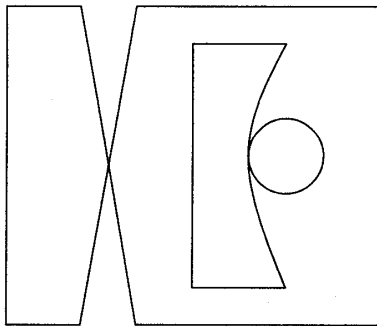
まとめりとして(ケーラーの言葉で言えば、体制化されたものとして)知覚する可能性があることは認められると思われる。

ここで問題であるのは、上記のような事実を理由として、ケーラーがゲシュタルトは経験に先立って知覚される、すなわち感覚所与であると結論づけることである。

次のようなことは頻繁に起こっているのだ。例えば、夜中にうろついていたら目のなにかに気づくとする。私はそれが何であるのかまったく予想がつかないにもかかわらず、私にはユニット(ひとまとめり)として見えたのである。このような場合、感覚野はその対象についての使用や実用的な意味に関していまだ明瞭な過去経験を生み出してはいない。にもかかわらず、私の前にはまとめりがある。したがって、このまとめりが存在しているということは過去の再生産によるのではないと言えることができる²⁷⁾。

上記の引用箇所以外でも、下図4のような図形に関して、ケーラーはそれを初めて見るにもかかわらず、まとめりとして見ていることを指摘し、それを理由にゲシュタルトが感覚所与であると論じている²⁸⁾。

図4



だが、過去に見たことがないものを、それでもひとまとめりとして見ることは、ゲシュタルトが感覚所与であることを意味しない。そのようなことが可能なのは、知覚者がすでに図形や絵という概念を知っており、それがひとつの図形や絵としてのまとめりであることを理解しているからである。絵として見なすという生活形式(Lebensform)の一致に基づいて²⁹⁾、私たちは図4の使用の仕方や実用的な意味を知らなくても、魚としてや、(90度回転させると)トロフィーとして見るのできるのである³⁰⁾。

以上のことから、次のことを結論することができる。すなわち、感覚所与としてのゲシュタルトを見るという仮説は、私たちがその対象をいかに扱うようになる

のかに対して無用な措定である。たとえケーラーのゲシュタルト概念について誤解しているにせよ、ウィトゲンシュタインがそれを奇妙な構成物と呼んだ理由はこのことにあったと解釈することができるのである。

ケーラーは、例えば図1を立体的なものとして扱うような私たちの行為が大体において一致していることから、そのような行為とは独立して、それを導くような境界づけられたまとめりを見ていると考えた。赤ん坊でも動物でも何かを見ていることを認めるとしても、ウィトゲンシュタインによれば、あるアスペクトとして見るということは、私たちがそれを名指すことや、何らかのものとして扱うというような行為と独立にあるわけではない。

ここである留保が必要となる。例えば、Pが紙に書かれた立方体(図1)を示されながら、頂点や底辺などの言葉を教えられたと想定しよう。だが、Pはそれだけで直線や底辺を見ていると言えるだろうか。いや、言えない。Pが教えられた時にだけ、教えられた図形に対してだけ、頂点や底辺と言うことは、それを名指すような言語行為を行っているのではなく、そのように条件づけられているにすぎない。

三角形の図形[あるいは立方体図形など]において、私はこれを頂点、これを底辺と見て、今はこれを頂点、これを底辺と見る。明らかなことだが、たっただいま頂点、底辺などの概念に出合ったばかりの生徒にとって「私は今これを頂点と見る」という言葉はまだ何も意味することはできない。だが、私はこのことを経験的な命題のつもりで言っているのではない³¹⁾。

ウィトゲンシュタインは「見る(sehen)」と「知っている(wissen)」とを区別する。頂点や底辺を教えられた生徒は、目の前の図形でそれらとみなせることを命題として知っていると言えるかもしれない。だが、そのことは、その生徒が頂点や底辺として見ていると言えるのに十分ではない。その生徒がほかの図形においても同じように底辺や頂点という概念を適用するようになる場合にはじめて、それらを見ていると言えるのである。

以上のことから、次のことが言える。ケーラーのゲシュタルトとは異なり、アスペクトは、私たちがそれに対していかなる態度(Einstellung)³²⁾を取るのかに先立って与えられているのではなく、それとして扱う行為を通じて境界づけられるものである(あるものを扱う態度のうちに生活形式は示されている)。そして、

あるアスペクトを見ると言えるのは、それとして見なせることをただ知っているだけではなく、それに対する態度を取り続けていくことができるとき、そしてそのときに限られる³³⁾。言い換えれば、アスペクト知覚とは私たちが対象に対していかなる態度を取るのかということと内的関係にある知覚なのである。

アスペクトの表現とは把握の仕方の表現である(したがって、ある扱い方の表現であり、ある技術の表現である)³⁴⁾。

ここで注意することは、ある態度を取るということは、第三者に分かるような振る舞いだけではなく、例えば、目の前の図形を見て即座に三角形として捉えるようなことも含まれているということである。描かれた対象はいかなる解釈も許されているにもかかわらず、それを即座に三角形と見なすということのうちにも、その人の態度は示されている³⁵⁾。ある態度を取るということは、そのような言語ゲームを行うことをも含んでいるのである。

最後に二つの留保を簡潔に述べて本論文を終わりとしよう。一点目は、本議論でアスペクト知覚が行為と内的関係にあることが示されたとしても、それだけでアスペクト知覚という概念が十分に規定されたわけではないということである。というのも、知覚が行為と内的関係にあるというだけであるならば、そのような知覚は言語を持たない動物でも所有しているように思われるからである。例えば、私の飼い猫は兄弟の猫と、近所で飼われている(敵としての)ボス猫とをはっきりと区別した行動を取る³⁶⁾。このような知覚から、アスペクト知覚は本質的に区別しえるのだろうか。私は、本文で少し言及したように、アスペクト知覚は異なるアスペクトを(として)という枠組みで捉える可能性を有しているという点で、両者は本質的に区別されると考える。だが、そのことについてはまた別に論じる必要がある。

二点目に移ろう。本議論でアスペクト知覚がケーラーのゲシュタルト説と異なることが示されたとする、そのことにより、アスペクト知覚が、図形の多義性を知的作用による判断に基づくとするグラーツ学派の主張に似た概念であると思われるかもしれない。結論から言えば、そうとはならないと思われる。というのも、ウイトゲンシュタインは見ることを「状態(Zustand)」と呼び、そのつど「解釈(Deutung)」(判断)することと区別するからである。

問題は、図形のある解釈に従って見ることがで

きるとすれば、人はつねにある解釈に従って図形を見ているのか、ということである³⁷⁾。「だがある物をひとつの解釈に従って見るといふことはいかにして可能なのか」—この問いはそのことを奇妙な事実として描き出している。あたかもここにおいては、本当はうまく適合しないものが無理やりひとつの形式に押し込められてしまっているかのように。だが、ここには押さえつけることも押し込めることも生じてはいない³⁸⁾。

もちろん、「状態」と「解釈」という区別の妥当性もまた考察されなければならない。だが、その詳細についても別の機会に譲ることにしようと思う。

(指導教授 川本隆史教授)

注

- 1) ゲシュタルト心理学に関する哲学的な立場からの簡潔な説明は、ハムリン(1990)、村田(1995)、直江・鯨岡(2002)、Smith(1988)を参照することができる。
- 2) 詳細については Ehrenfels(1988)を参照のこと。
- 3) 「当時の心理学」とは、哲学者ヒューム(David Hume)の影響を受けているヴント心理学などを指す。ヒュームによれば外的対象から与えられる感覚は原子論的な感覚印象の集まりによって構成されている。ここではヒュームその人の具体的な内実については関わらず、当時の心理学者が理解していた限りでのヒュームの思想とする。
- 4) ケーラーが恒常仮説を初めて批判するのは、Köhler(1971)においてである。さらにケーラー以外のベルリン学派の人々の恒常仮説に関する反応については、Ash(1982)を参照のこと。
- 5) 詳細については、ハムリン(1990)を参照のこと。
- 6) ケーラー、1971、pp.38-9.
- 7) 「現にスクリーン上では実際運動など少しも生じていず、自分たちが見ていると思っているのは二、三分の間に起こる何千回もの誤った判断の結果に過ぎないのだということを信じさせるのは容易ではない」(ケーラー、1971、p.39)。また、現在の映画技術はこのような形式ではないかもしれない。その場合には、テレビのアニメなどを思い浮かべるとよいだろう。
- 8) ここでは留保が必要である。というのも、例えばスクリーン上における人物がある人物であるということや、ある対象がある対象であるということが理解されるときには、判断がなされていると思われるからである。
- 9) Köhler、1929、pp.141-3.
- 10) Ibid.、pp.115-6.
- 11) 米沢、2003、p.219.
- 12) 「私たちはある物ある物として(als etwas)決して見ないような人たちのことを思い描くことができるのか。(略)そのような人たちをとりあえず『ゲシュタルト盲である』または『アスペクト盲である』と呼んでおく」(RPP2、478-81.)。なお、ウイトゲンシュ

- タインの著作からの引用にあたっては、以下の略号を用いることにする。邦訳のあるものは参照させていただき、多くの示唆を得たが、文体の統一などの理由もあって適宜、修正を施している。訳者の方々にはご理解をいただきたい。略記号の後の番号は原文の節番号を表す。ただし、『哲学探究 第Ⅱ部』の引用に関してのみ、節番号の割り当てがないため、章番号を付す。また、ワイトゲンシュタインの著作に限らず、引用文中における傍点(原文の斜体)および「(“)」による強調は、特に断りのない限り原文に付されているものである。引用者が補足する場合には、ブラケット(□)を用いている。PI— *Philosophical Investigations: the German Text with a Revised English Translation*, Blackwell Publishing, 1953. (『哲学探究 第Ⅰ部』を『探究Ⅰ』、『哲学探究 第Ⅱ部』を『探究Ⅱ』と略す) RPP1— *Remarks on the Philosophy of Psychology volume 1*, Basil Blackwell, 1980. (『心理学Ⅰ』) RPP2— *Remarks on the Philosophy of Psychology volume 2*, Basil Blackwell, 1980. (『心理学Ⅱ』) LW1— *Last Writings on the Philosophy of Psychology volume 1: Preliminary Studies for Part 2 of Philosophical Investigations*, Basil Blackwell, 1982. (『手稿Ⅰ』)
- 13) RPP1, 869.
- 14) Schulte, 1993, p.84.
- 15) 例えば、次の一節が挙げられる。「『見る(sehen)』という言葉を使用するようになるとはいかなる意味であるかを考えてみよ。自分たちの視覚像—色と形—が絶え間なく非常に広範囲にわたって変化するにもかかわらず、ある人を見ているとか、その花を見ていると言うのは確かである。私たちは『見る』という言葉をもっとそのように使用するのである」(RPP1, 1070.)。
- 16) Schulte(1993)によれば、ワイトゲンシュタインはケーラーの主張を反駁しようとしたのではない。「ワイトゲンシュタインはケーラーを反駁する説を唱えようとするのではない。すなわち、彼は知覚には意味やそれに近いものが前提にされていると主張しようとしていない。彼はただ直接知覚という行為はただ純粋なゲシュタルトや境界づけられたものを指示するだけではなく、その意味あるいは意味の一部を含んでいることを指摘したいだけである」(Schulte, 1993, p.84)。だが、ワイトゲンシュタインがそのことだけを主張しているならば、ワイトゲンシュタインの述べることはケーラーの主張と両立できるものであり、わざわざケーラーを批判的に取り上げる必要はなかったであろう。
- 17) PI. xi.
- 18) 「子どもたちが汽車ごっこをしているとき、蒸気機関車のまねをしている子どもはほかの子どもたちから蒸気機関車として見られていると言うべきであろうか。その子どもは、ゲームの中で蒸気機関車とみなされているのである」(RPP1, 411.)。
- 19) ケーラーはゲシュタルトの知覚を〈直接経験(direct experience)〉と呼び、意味以前の知覚であると述べている。だが、このケーラーの概念は、単にそのものを見たことがないというように、過去の経験がないということだけを意味している。ケーラーは、純粋に生まれたばかりの赤ん坊の知覚と、すでにある程度の概念を身につけている子どものそれとを区別せずに混同させている。
- 20) PI. xi.
- 21) PI. xi.
- 22) ケーラーはアヒルとウサギの反転図形などの多義図形を研究しているグラーツ学派、中でもベヌッシ(Vittorio Benussi)の仕事を賞賛しており(Ash, 1982, p.343)、すでに図形のアスペクト(ワイトゲンシュタインの言う「体制」)が反転するという事態を十分知っているはずである(したがって、アスペクトの反転という事態だけで、ケーラーの自然的体制という概念が反駁されるわけではないだろう)。図形のアスペクトが反転するという事態は、ケーラーにとって、別の説明を要することだと考えられていると思われる。
- 23) RPP1, 74.
- 24) だが、ここでは以下のような留保が必要である。それは、ウサギを知らない人でも、絵や動物であることを知っているならば、それを絵や動物の絵として見なすというような可能性は排除されていないということである。ここで排除されることは、そのような可能性ではなく、端的にある概念を知らない人が、それにもかかわらず、まさにそれを見ているという可能性である。
- 25) ウイトゲンシュタインがケーラーの主張を解釈したものとして次の一節を挙げることができる。「ケーラーの言うことはおおよそ次のようなことではないか。『もし、人がある物をなんらかのものとして見るができないならば、そのようなものとみなす(für halten)ことはできない』。子どもは、あるものを何かとしてみなせるようになるのに先立って、まずそれとして見ることを始めるのだろうか」(RPP1, 977.)。
- 26) PI. 139.
- 27) Köhler, 1971, p.150.
- 28) ケーラー, 1971, pp.51-4. 本文中の図4にはルート16($\sqrt{16}$)という形が含まれている。ケーラーは、そのような馴染みの形を見出すことができないということから、「われわれの見るのはまったく知らない大きなひとまとまりで、肝心の部分がそこから視覚的に分離されてこない」(p.51.)と述べ、「したがって明らかに、視覚的対象が確立される際の原理は、経験論的説明、すなわち学習による説明から予測されるような過程とは異なるものである」(p.52.)と結論付ける。だが、ケーラーの示したことは絵としてのまとまりを見るということではしなく、それが経験以前の所与として与えられるということではない。
- 29) 『探究Ⅰ』における言語ゲームについての言及の中で、「生活形式の一致」という言葉は登場する。『「つまり、君は何が正しくて何が誤っているのかを、人間の一致が決定すると言っているのか」。—正しいものと誤っているものとは、人間がそう言うことである。そして、言語において人間は一致する。それは意見の一致ではなく、生活形式の一致なのである。(略)言語による意思疎通の一部になっているのは、諸々の定義の一致だけではなく(非常に奇妙に響くかもしれないが)、諸判断の一致なのである」(PI. 241-2.)。アスペクト知覚について、例えば異なるアスペクトについて意思疎通するのもまた、諸判断、あるいは生活形式の一致に基づいている。
- 30) 物理的な能力としての「できる」と、「可能性を有している」の「できる」を区別するならば、本文の「できる」は後者である。
- 31) PI. xi.
- 32) ウイトゲンシュタインの用いる「態度」という語は自己決定するという意味では使われていない。『「私にはそれは矢の突き刺さった動物である』。私はその描かれた動物をそのように扱う。これがその図に対する私の態度である。これが描かれた動物を「見る」

- と名づけるひとつの意味である(LW1, 665.; PI. xi.)。
- 33)「あることができ、それを学んでおり、それに習熟している人に対してのみ、彼はそのような経験をしているということが意味を持つ」(RPP2, 484.; PI. xi.)。
- 34)RPP1, 1025.
- 35)「ある人が次のように言う。『私は即座にそれを二つの六角形と見た。そしてそれが私が見たすべてである』。このようなことに対して私はどのように理解すればよいのか。私が考えるには、彼はこの記述を『あなたは今何を見えていますか』と言う質問に対して即座に答えたのである。彼は多くの可能な記述のうちのひとつとして扱ったわけではない』(PI. xi.)。
- 36)実際には、ケーラーのゲシュタルトに対する研究も猿の行動が出发点であり、言語を持たない動物もゲシュタルトを見ているという発想に至っている。
- 37)RPP2, 359.
- 38)RPP2, 36.; PI. xi.

参考文献

- 1) Ash, M. G., "The Emergence of Gestalt Theory; Experimental Psychology in Germany 1980-1920", Harvard University Ph. D., University Microfilms International, 1982.
- 2) Ehrenfels, C. V., On "Gestalt Qualities" translated by Smith. B., in "Foundations of Gestalt Theory", Philosophia Verlag, 1988, pp.82-120.; Über "Gestaltqualitäten" in "Philosophische Schriften", Band. 3, Philosophia Verlag, 1988, pp.128-67.
- 3) ハムリン, D. W., 吉岡一郎訳『知覚の心理学』, 北大路書房, 1990.
- 4) Köhler, W., "Gestalt Psychology", H. Liveright, 1929. [佐久間鼎訳, 『ゲシュタルト心理学』, 内田老鶴圃, 1934.]
- 5) — On Unnoticed Sensations and Errors of Judgment translated by Adler, H. E. in "The selected papers of Wolfgang Köhler", Liveright., 1971.
- 6) ケーラー, W., 田中良久・上村保子訳『ゲシュタルト心理学入門』, 東京大学出版会, 1971.
- 7) Mulhall, S., "On Being In the World: Wittgenstein and Heidegger on Seeing Aspects", Routledge, 1993.
- 8) 村田純一, 『知覚と生活世界: 知の現象学的理論』, 東京大学出版会, 1995.
- 9) 直江清隆・鯨岡峻, 「ゲシュタルト理論の射程」, 渡辺恒夫(ほか)編『心理学の哲学』, 北大路書房, 2002.
- 10) 野矢茂樹, 「〈…として見る〉の文法—ウィトゲンシュタインのアスペクト知覚について」, 『理想』632号所収, 1986, pp.150-61.
- 11) Schulte, J., "Experience and Expression: Wittgenstein's Philosophy of Psychology", Oxford University Press, 1993.
- 12) Smith, B., Gestalt Theory: An Essay in Philosophy, in "Foundations of Gestalt Theory", Philosophia Verlag, 1988, pp.11-81.
- 13) Stromberg, W. H., Wittgenstein and the Nativism- Empiricism Controversy, in "Philosophy and Phenomenological Research 41", 1980.
- 14) 米沢克夫, 「ウィトゲンシュタイン哲学の発展にゲシュタルト心理学はどのような意味を持ったのか」, 『帝京大学文学部紀要』28号所収, 2003, pp.211-53.